概　要　報　告

実施期日	８月２日(水)
部　会　名	小学校　特別活動部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びからの授業改善

テーマ

『話合い活動を通して、相手の思いを受け止め、自分の思いを発信できる子の育成』

提案概要

本提案は、話合い活動を中心とした学級づくりに焦点を当て、研究を行ったものである。『ひみつのきもちぎんこう』（金の星社）という本をもとに考えた「チャリーンもくひょう」という学級目標を主軸として、話合いの仕方や指導の工夫など、具体的な手立てを研究し、児童同士が集団として高まりを実感できるよう研究を進めてきた。

年間指導計画を下記のように設定し、主に２学期以降、いくつかの視点をもち、指導を行った。

１学期…知り合う　当番活動（リーダー活動）、関係づくりのゲーム

２学期…かかわり合う　自分の目標、クラスの目標、目標達成パーティ

３学期…認め合う・高め合う　目標に関係した取組、がんばったねパーティ、１年間の振り返り

【視点１】学級会で様々な意見を出し合ったり、比べたりできるようにするため、賛成、反対、意見をかえる３種類のマグネットを使って思考を可視化した。発言した児童はすぐにマグネットを貼りに行くことで、クラス全体が同じ視点に立って考えを共有することができた。

【視点２】国語科と関連した指導を行った。

・「はなしあいのわざ」⇒児童から出された意見の共通点や相違点の表現例。教室の壁面に掲示し、日頃から活用できるようにした。

・「うれしくなるききかた『あいうえお』」⇒友だちの話を聞くときの姿勢や態度を示した表現例。

・１０月からチャリーントークという話合い活動を行った。話題について質問やアドバイスをしたり、自分の経験を話したり、自由に語り合うことで自分の考えを伝える経験を積み重ねていった。

【視点３】児童が主体的に話合いを展開できるような学びの場を工夫する。司会を２名が交代して行い司会台本を原案プリントの裏に印刷したことで、全児童が今何を話しているのかがわかり、児童同士で言葉をつなぎながら進行することができた。

【かかわり合う実践】

・一人ひとりが達成したいチャリーンは何かを考え、個人の目標をチャリーンカードに記入した。達成するごとにシールを貼り、目標が達成していく過程を視覚的に捉えられるようにした。

・クラスの目標として合言葉とポーズを考えた。みんなで集めたチャリーンを友だちに関すること、学習に関することに分けて集約し、合言葉を設定した。また、クラス目標に合ったポーズを考えることで、喜びの瞬間や成長をその場で共有できるようになると考え、話合いに臨んだ。

・話合いでは、今まで積み重ねてきたチャリーントークの成果が見られ、学級をよりよくしていこうとする児童の姿が見られた。最終的には、折衷案ではなく、児童のそれぞれの思いを大切にする意見で話がまとまった。

【認め合う・高め合う実践】

・一年間のまとめとして、自分自身や自分のクラスを振り返り、できるようになった成果を実感し伝え合う活動を行った。

・友だちのチャリーン（いいところ）をみつけてカードに書き、プレゼントする。この活動を積み重ねることで、日頃から肯定的な言葉を伝える雰囲気が見られるようになった。

・友だちのよさをもっと知るチャリーンパーティ（集会活動）を行った。集会活動の後には、学級目標と関連付けた振り返りを行うことで、自分の振り返りだけでなく、友だちの視点に立った振り返りをすることができた。
・何の遊びをするかの話合い活動では、意見が二つに分かれ、多数決で決まったという課題が残った。「何を大切にするのか」という視点がずれることのないよう、教師が内容を整理することも時には必要ではないか。

協議の柱及び協議概要

柱１　クラスでの話合いでどのような工夫をしているか。どんなツールを持っているか。

・時間が限られているため、話合いの前に司会や全体と流れと時間の確認を事前に行う。
・なぜこの話合いをしているのか、提案理由や話合いの目的を明確にする。
・意見が言えない子は書いて示すなどの手立てをし、全員が自分の考えを言えるようにする。
・意見交流の時間を設ける。
・少数派の意見も認め、普段話せない子も意見を言いやすい環境づくりやできる限り多数決で決めないような声かけを意識している。
・中学校では、ツールとしてロイロノート、Googleフォーム、スプレッドシート、スライド、ジャムボード、クラスルームなどを活用し、思考を可視化して一目で見てわかるような工夫をしている学校もある。
・キーワードをつなげるイメージマップを活用したり、名前マグネットを使って意思表示をしたりしている。
・小学校では、初めは枠や型を作って話合いを進めることも必要。学年に応じた形で系統的に積み重ねていくことが大切。

柱２　「話合い、大事だな」と感じた瞬間はどんなときか。

・特別活動を通してクラスが良くなったと感じたとき。
・他者の意見を聞いて自分の意見を変えることができたとき。
・子どもの困り感が出たとき。子どものうちに発信し、考えないと困るという経験をしてほしい。
・行事などで役割を決める際、じゃんけんで決めず譲り合って決められるようになる。子どもたちが納得して取り組める。
・教師が言うよりも浸透しやすく、改善につながりやすい。子どもたちの言葉の方が納得しやすい。

まとめ概要

・話合いをまとめる際、多数決ではなく、相手の思いを受け止め、合意形成ができる子になってほしい。しかしながら、中学校では、小学校のような話合い活動の時間の確保が厳しく、多数決として進めがちである。また、学活の時間はやらなくてはならない課題があるため、話合い活動は道徳や総合の時間を使って行っている現状もある。
・学年が上がるに連れて意見が出づらかったりまとまらなかったりすることが増えてくる。小学校低学年のうちから、自分の意見を相手に伝える練習をすることはとても大切である。今回の提案のようにマグネットを使用して黒板を有効に使ったり、ICTを大いに活用して思考を可視化したりすることで、全員が参加しやすい環境づくりにつながっていくだろう。
・教師はできるだけ介入せず、子どもたちだけで話合いを進めることが理想ではあるが、より目的に合った話合いをするためには、時には教師が介入し、話を整理することも大切である。